

財団法人日本社会福祉弘済会助成事業

第23号  
Vol.8-2  
2011年9月1日

# Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人嬉泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 8-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-84-21-7864 E-mail: [konkn@tm.net.my](mailto:konkn@tm.net.my)



みんな仲よし・イバンの子どもたち

撮影者 田中 荘太

この何年か、私はほぼ毎夜手紙を書いている。多くはお願いや、お世話になったお礼だったり、仲間になって下さいとお誘いの手紙だが、先ず宛先の名前を書き、その人に話しかける準備をする。手紙の最後に自分の名を書く。すべて手で書く。名前は記号みたいなものという人がいるが、とんでもない。名前を書くことでその人が眼前に現れ、語りかける気分になる。会ったことのない人でも、回を重ねると友人の気分である。

初めの頃、かなり億劫だった。何しろ手書きは時間がかかる。だからつい雑な字になった。この頃少し違ってきた。下手な字でも丁寧に書けば読めるかと、気持ちを込めて、ゆっくり書くようになった。時間はさらにかかるが、心地良さが残る。会話を交わしたような楽しさが味わえる。専用の小型便箋に、毎晩その人あの人を心に浮かべながら書いている。密かな楽しみになってきた。

最近、日本人の間でも手書きの

手紙は減った。e-mailが主流だし、ケイタイ全盛だから仕方がない。私も度々利用しているe-mail。だが、時に宛先もなく署名もないメールには戸惑う。誰に書いているの？本当に私宛？と心配になったりする。忙しいのか、関係が希薄になったということか。たかがメールだが、せめて相手と自分の名前を書くことで、ちょっぴり心と心を通わせ、気持ちを和ませられたらと思う。そんなことを思いながら、今夜も手紙を書く。(健)

## 新たな「草の根国際協力」の構築に向けて



水上生活村落・ヌンバック村

ボルネオ島にあるコタ・キナバル(通称KK)という街に住み始めて8年がたち、様々な出会いがありました。そのなかで、最も思い出深いのは、「ボルネオ・プロジェクト」(通称BP)という早稲田大学にある学生のグループのメンバーとの出会いです。

KKの街の外れにあるヌンバックと呼ばれる村。年に2回大学の休みを利用して、ボランティア活動を、6年間にわたって持続している早稲田BPのメンバーには、何時も頭が下がる思いがします。

元青年協力隊員で、現在は、マレーシアCFで活躍している安部さんから、5年ほど前に、「日本から若者が来てボルネオ島でボランティアをしている」と聞いた時には本当に驚きました。2007年の2月、BPの草創期からその活動を見守ってきた安部さんやBPのメンバーと一緒にBPの活動拠点であるフィリピン移民のヌンバック村を訪問した経験は、今でも良く覚えています。早稲田BPのメンバーは、ヌンバック村が水上村落であるという特異性に着目し、海の上に村があるために、ゴミ処理のシステムがなく、海水や海岸の汚染問題が存在することが最大の問題であ

ると結論し、その解決案としてヌンバック村にある学校を訪れ、子供たちに環境教育を行うとともにKK市役所などにも働きかけて、ゴミ回収のシステムを構築するため努力していると聞きました。2007年の夏休みの渡航の際から、それまでの子供向けの環境教育は継続しながらそれ以外にも、村人を結集してゴトン・ロヨンと呼ばれる大規模な清掃を活動の中心としながらゴミ問題の解決に正面から取り組んでいる事実を、深く感動しました。

日本の学生がボルネオ島に来て、大人の力を借りず、自分たちに何が出来かを話し合い、力と知恵を出しあってボランティア活動をするという、学生が中心の「草の根の国際協力」に深く感銘し、マレーシアの学生も学ぶ事が多いと思い、マレーシア国立サバ大学(UNS)の学生に早稲田大学の学生を支援することを要請しました。

当初は、UNSの学生は、地元社会のエリートであり、地味なボランティア活動に参加する学生は少ないのではと危惧していましたが、早稲田BPのメンバーの「熱い思い」が、UNSの学生に通じたのか、予想以上に、多くのマレーシアの学

マレーシア国立サバ大学  
準教授 古岡 文貴

生もBPの活動に参加し、マレーシアと日本の学生と一緒に汗を流しながら、ボルネオ島でボランティア活動をするようになりました。

また、和光大学の加藤さんも、早稲田BPの活動を支援しており、和光大学の近くの岡上小学校という学校で、早稲田の学生がボルネオ島の子供たちのことを紹介するとともに、日本の小学生たちのことをマレーシアの子供たちに紹介するという非常に有意義な「国際教育交流」が実施されていると聞いております。

結論として、政府主導の国際協力では、お金がかかりすぎるし、官僚的になりがちです。また、どうしても現地の住民と援助を進める側の溝が大きくなりすぎる傾向があります。それに対して、早稲田BPの活動は、ボランティア活動であるために、お金を無駄にすることもありませんし、組織も巨大化してないので、官僚的になる可能性も低いと思われます。

そして、一番重要なのは、BPの活動が、「現地の視点」に立っている事だと思われます。政府間の国際協力が、両国のエリートを通じて、政府の間で行われているのに対して、早稲田BPの活動が、マレーシアでもまだまだ貧しいボルネオ島を選び、中でも一番困難と思われる「移民」の問題、ごみの問題に取り組んでいる所に強みがあると思われます。また、政府の決定では、住民の意見が反映されない傾向にあるのに対して、BPの活動は、現地の立場をどこまでも尊重する姿勢があるのには、何時も感心しています。

BPの活動には、政府主導で進められてきた日本の国際協力を補完し、新たな「草の根国際協力」の構築する萌芽があると期待しているのです。

## Dari Penang Tシャツでの協力

ペナン在住  
星野 由美子

私が中澤先生に初めてお目に掛かったのは2度目にペナンに住み始めた直後だったと思います。夫の仕事で1975年から約3年ペナンに駐在して夫婦ともすっかりこの地が気に入り、退職後は必ずペナンで過ごそうと決めて実行したのが1997年春でした。

先生もまたACSを始められたばかりの頃で、どこからか白無地のTシャツを寄付されてどうしようかというお話を伺いました。たまたま私が中国画を習っていた教室でアクリル絵の具を使ってTシャツに画を描いていたという全く偶然のタイミングでした。画の先生に話してデザインを頂いたり、教室の友達や先生にも描いていただいて、30枚ほどができあがり販売することが出来ました。ACSを支援するためにこれをやってみようと思っ早速シャツを注文し、ACSではシャツに付けるオリジナルのラベルを注文して下さいました。それが2~3000枚もあったのか14年経った今でもまだ充分あるとシャツ屋に笑われています。

グループ名を Dari Penang (マレー語でペナンよりの意)と決め、中国系のマレーシア人5人ほどが毎週日曜日の午後にペナンスポーツクラブに集まって作業を始めました。リーダー格は引退した美術の先生 Lucyで、私が販売、その他雑事を担当して14年続いています。

当初は何を描けばいいのかわからずデザインを探すのに苦労しました。子供用には平気でディズニーのキャラクターを使うのはびっくりしました。日本ではちょっと理解できませんが、こちらでは大きな病院のロビーで、一ヶ月にわたってクリスマスセールをします。そこにテーブルを出して、ACSのメンバーが作った「さをり織」やパティック染めの小物と一緒に私たちのシャツも売りました。でも成績は芳しくなく1枚も売れな

い日もあり、お店番が暇で最後には自分で購入したりしたものでした。今では懐かしい思い出です。私の両親が弱って私が2ヶ月毎には帰国していましたがその時に持ち帰って友達に買って貰ったりもしていました。

初めは半期にRM 1000 を寄付するのがやっとでしたが、だんだん日本でリピーターが増えたり、あちこちのバザーに出したりして少しずつですが寄付額を増やすことが出来ました。円高になってきたことも有利に働いています。

昨年4月、ACSの内海さんの紹介で上野のギャラリー付きカフェ「めぐり」のオーナー岡戸めぐみさんと出会いました。お店では身体に優しい食材を使った美味しい料理を提供し、ギャラリーでは色々なチャリティーにも協力しておられて早速販売して下さいました。私たちのシャツのデザインがマンネリ化しているとお話するとデザイナーのお知り合いが多く、「Tシャツのデザイン募集」を提案して下さい9月には30枚近いデザイン画が集まりました。展示会を開催しデザイナーを招待してパーティーもしました。

利益は全額ACSとRCSに寄付することを理解して下さい、版權はすべてダリペナンに寄付して下さいました。今年も5月に2週間「ダリペナンTシャツ展示販売」をさせて頂きました。3月の大震災の後で去年ほどの売り上げはむつかしいかと思っておりましたが、皆さんが優しい気持ちを持って下さったのか、新記録の146枚を販売することが出来ました。

中澤先生がACEの総会で帰国しておられる間に偶

然に岡戸さんにお会いになるチャンスがあったと伺い、何か不思議な赤い糸を感じます。今年の前半期にはACS、RCSにRM 8000~3つ(計45万円)を送ることが出来てとても満足しています。

ダリペナンのメンバーは、今ではLucyの他は退職後にペナンで生活しているシニアの日本人6、7人です。アクリル絵の具で画を描くのはもちろんですが、筆より針と糸の方が好きという人もいて、ビーズ、スパンコールやレースを縫いつけて日本人ならではの細かい作業を丁寧にして、皆さんにかわいがって頂いています。

シャツを注文するときには何時もこのシャツを全部売ることが出来るのかと不安になりますが、岡戸さんやその他沢山のサポーターに助けられて続けています。

IPを作っております。興味があればご覧頂いてメールで注文して頂けるととてもうれしいです。

<http://dari.penang.blog96.fc2.com>



“ダリペナン” Tシャツ制作中

# 華僑の町シブ

加藤 昌美

私はマレーシアのシブという町に住んで4年ほど経ちます。人口の70%が華僑だといわれるチャイニーズの町です。ですから、マレーシアでありながら、マレー語、英語ができなくても、中国語ができれば生活に困ることはまずないという特異な町です。

華僑の中でも福州人がとても多く、ほとんどの華僑が家族、友達

英語だったりすることもあります(笑)。一つの言語だけで生活してきた私から見ると、マレーシア人は子供からお年寄りまで言語の天才に見えます。

この間、福州人の友達と共通の友人をおもてなししようということで、一緒に食事を作りました。それぞれが何を作るか、材料は何にするか、どう調理し、何が必要

間を過ごしていくうちに、福州語と日本語には似ている言葉が幾つもあることに気がつきました。例えば、「時間」は「シカン」、「世界」は「セカイ」、1から10の教え方もよく似ています。そんな共通点を見つけると、みんな決まって「だって私たちと日本人の先祖は一緒なんだよ〜」とうれしそうに言います。

私がこの町で学んだ「日常語」は、マレーシアの他の町、ましてや日本に帰ったら全く役に立たないものかもしれませんが、この「日常語」こそ、私がシブという町で生活したこと、そしてその生活をいろいろな形で助け支えてくれた友達がいることを私に思い起こさせてくれる大切なことです。



食材調達の名点・様々な言語と人で活気あふれるシブの中央市場

とは福州語で話します。

私は、日本で2年ほど、中国語を学んでマレーシアに来たのですが、シブに来たばかりの頃は、周りの華僑の話すことがほとんど分からず落ち込んだものです。しばらくして、自分の学んできた中国語(普通話)とシブの人たちが話す福州語は全く違うものだと知って少し安心しましたが…。

中国大陸から外国に来てたくましく商売をする華僑は、自分たちの国の言葉(方言)を引き続き使いつつ、新しい土地の言葉も耳をたよりに習得していきます。ですから、ここでお野菜を売る華僑のおばちゃんたちは、中国語も福州語もマレー語も話せて、すべて混ぜて自分の言いたいことを表現します。聞きなれない言葉に遭遇して、「それは何語?」と聞くと、

か…、こういう話し合いをするときは本当に大変!日本で学んできた「普通話」の中国語で、「私はジャガイモでサラダを作る」と言っても、「はあ〜?」と言われてしまいます。なんとか説明して、彼女が「あ〜、ジャガイモでサラダを作るのね〜!」と言った時、ジャガイモは福州語、サラダは英語、作るは中国語でした…。スープを作るのにおたまを使うので、おたまを見せながら、「これはなんて言うの?」と聞くと、「ビュービュー」。「え、何語?」「福州語」といったような会話が延々と続きます。こうして彼女たちと時



地元料理づくりに欠かせない友人たち



本日の料理完成



つくった料理を味わうひと時(向かって左が筆者)

## ACSだより ベナン在住 内海 明美

☆☆☆ 日本がんばれ！☆☆☆



日本総領事館に寄付金を渡すメンバーとアイナ

東日本大災害後数日間、作業所の利用者が毎日のように新聞の津

波記事を作業所に持ってきてくれて「大変だ」「かしいそうだ」「

大丈夫？」とたずねていました。そのうちの1人が「寄付を集めないのか？」と尋ねました。津波関連の新聞記事を切り抜き、パネルをつくり、午後の集まりで義捐金を集めることを利用者、職員、友人たちに伝えました。準備したプラスチック容器に日本を思う人たちの心が反映し、それを通し他の人たちの心にもこの思いが感染していきました。

ACSの利用者の日本を思う心、それはACS創設以来から日本人が関わり、たくさんの日本人が訪問していただき、伝えてくださった見えないたくさんの良きことが、彼らの心に残り続けているからでしょう。2011年5月、集まった約3,000をベナン島の日本総領事館にて義捐金寄付をすることができました。これからもACSは日本の復興を応援します。



## RCSはいま 中澤 和代

☆☆☆ 染め糸の行方 ☆☆☆

Mahilohセンターには、いろいろな楽しいことがある。スポーツも音楽も、食事も！

でも、あるメンバーにとってのメインは絶対に織物！昼休みでも帰宅前でも、時間さえあれば織機の前に座り、次への準備をしている。織りをするためには、糸が不可欠。今、どうしたらSarawakの植物からきれいな染料がとれるか、私たちは、自然染色の方法や植物からの色出しを試行錯誤、奮闘中。一週間に何色をどれぐらい染めるか、計算しながら、いろいろな植物を採取し、煮出してみる。

ある日、次の予定を立てるために、現在、保管中の糸がどれぐらいあるかとスタッフに聞くと、「たくさんある！」との答え。現在在庫の糸色も気になり、確認のため見たいと思ったのだが、どこを見てもない。えっ、何で？とスタッフはあちこちを探している。「あった、あった！」と、声は織物の部屋から。行ってみると、段ボールの箱の中にある、ある！たく

さんある！染め上がりの具合を見ようとして手を入れてみると、何だか湿っぽい。ほとんど生乾き！「これでは駄目よ、きちんと乾かさないと…」、と言う私。スタッフは、答える。「Rositaが自分のためにKeepしたのだ」と。思わず笑った！そう言えば、Billyが言っていたなあ。「Rositaがきれいな色をみんな取ってしまう」と…。

そう、Rositaは明日のために、まだ濡れているけれど、好きな色を確保したのだ。生乾きの糸の束を再び干しながら「明日の予定を考えられるなんて、素晴らしいことだよー」と私はスタッフに語りかけた。嬉しい。

Rositaの方を見たら、彼女は可愛い顔をブンとそっぽ向けて出て行った。明日は生乾きは良くないことを伝えて彼女の好きな色の糸を

たくさん、選んでもらおう。織りは彼女の自信であり、誇り。糸はその要素だもの。



染めあがった糸を乾燥している様子



織りが楽しみのRosita(ロシタ)

# じゃらんじゃらん ちゃりゃんがらん♪ (23回)

## さかなでせっけん?!

## 上杉 誠

さて、まずは写真をご覧ください。黄色と黒の変わった色の魚が映っています。みなさんはこの魚が美味しそうに見えますか？それとも不味そうに見えますか？どちらかと言うと僕にはまずそうに見えてしまうのですが、この魚の名前は不味い！と言うことから来ています。その名も「キハツク」。漢字では木八束と書きますが、薪を八束使って料理しても不味いと言う意味だそうです。せっかく釣れたとしてもトホホな感じですね。でも、色合いは綺麗なもので、じゃあ熱帯魚として飼ってみよう、と言うことになってバケツに入れておいたりなんかすると、さらにトホホな結果が待っているのです。と言うのも、この魚、びっくりしたり、ストレスを感じたりすると身を守るために体の表面からなんと毒を出してしまいます。ちょっとぬるぬるした粘膜を出し、一緒にバケ

ツに入っている魚たちを殺してしまうのです…。

さらに、この毒の出た水をかき混ぜたりすると、だんだんとブクブク泡が立ってきます。まるでシャボンの泡のように。そんなところからこの魚は英語では「ソープフィッシュ(石鹸魚)」と呼ばれています。マレーシアではナマコを使った海鼠石鹸なるものが売っていますが、新しい商品として、この魚を使った魚石鹸と言うのも作れるかもしれませんね！ちょっと生臭そうではありますが…。

この魚、日本にも棲んではいますが、わりと珍しい魚。でも、ボルネオの海ではどこでも見られるくらい普通に沢山棲んでいます。

これを集めて新たなボルネオ名物を作れないものでしょうか？でも、泡立つからと言って、別に汚れが落ちていく訳ではありませんので、実際には石鹸は作れないん



ソープフィッシュ(石鹸魚)

じゃないかと思います。悪しからず。

さらに、この魚はハタに近い仲間なので、実際に食べてみると意外と美味しいらしいです。不味いと言う名前は見た目から来ているだけで、持っている毒も人は中毒しないそうなので、よ〜く洗えばちゃんと食べられます。「名は体を現す」と言う言葉が当てはまらない魚も中にはいるんですね。

Jalan Jalan cari kawan 社マレー語で友達を探しに行こうの意味です。

### 伝言板

- ・ポーリンが、今年5月からスーパーヴァイザー心得(Acting Supervisor)になりました。
- ・そのポーリン、9/17~10/13の間、「ばれっと・インターナショナル・JAPAN」(谷口泰保子理事長)のお招きで日本へ、ACE理事の土屋さんが中心になって、日本滞在中のサポート・ボランティアを募っています。
- ・地方会は今年、予定していました茨城県で会場予定だった建物が被災したため、今年度は行わず2012年度に行うことになりました。
- ・現地視察旅行は、参加者を募るのが困難なため、今年の事業計画からはずしました。希望があれば再開しますが、これについてご意見があれば是非お聞かせ下さい。

## ACEに入会のお誘い



### \*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種・宗教・性別・障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナンのMSとサラワクのMSの活動を支援しています。

### \*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 1.5万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

### \*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、ID、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

- ・日本では、連日のように猛暑が続き、震災津波や豪雨など、自然災害も含めて、異常と言える程の気象状況が心配です。それにしても熱中症ってどうなのでしょう？高齢の方や子どもが簡単に死に至ってしまう。昔はどうだったのだろうか？これ程、暑くなかったから？こちらでは、熱中症という言葉自体があまり、話題になっていません。日本人の体力の問題なのでしょう？

(Kazuo)

- ・ベナン時代から18年のお付き合いの古岡さんの早大生によるコクキナバルでの国際協力、もう16年、支え続けて下さっている星野さんのDARI PENANGグループ。本号まで1度も欠かさず海の探検しを書き綴り下さる上杉さん、中国系マレーシア人のお友だちとの言葉と料理の交流をお書き下さった真新しい知り合いの加藤さん。それぞれの素晴らしい色合いで、豊かな本号になりました。表の写真も、高知大学の田中先生が撮影されたものを使わせて頂きました。皆様のご協力に、心から感謝します。

(Ken)